

『平家物語』初期生成の一側面——『栄花物語』から定家へ——

尾崎 勇

はじめに——「世継物語」としての原『平家物語』——

西山の往生院の第三代院主である慈円が原『平家物語』の『治承物語』を企画して創出させた。この西山は、天台浄土教の礎を築いた源信の弟子の源算が長元年間(一〇二八～三七)に現在の京都市西京区大原野の山稜に別所をひらき善峯寺を建立して、その北側に隣接する空閑地に庵室を設けて住んだ。西山の往生院なのである。応保元年(一一六八)には観性が往生院の院主となり、建久元年(一一九〇)入滅した。そこで観性の弟子である慈円が次の往生院の院主に就く。その空間で原『平家物語』を企画・創出させていく。寿永二年(一一八三)頃から安貞二年(一二三三)当時まで徳大寺家が有力な壇越(金品を施す信者)であった。「頼朝の物語」を内実としている原『平家物語』の『治承物語』を遺存している屋代本『平家物語』にも、頼朝の挙兵へ展開させるにあたり、不吉な怪異現象や平家と争って勝利して頼朝へ政権が移る直前で「旧キ都ヲ来テミレハ(中略)秋風ノミソ身ニハシム」との今様をうたう徳大寺実定の形象は西山の宗教空間で創られており、実定の形象は頼朝が挙兵する前夜の「王法」の象徴であった。頼朝によって「王法」が静謐になっていく以前の荒んでしまった京の廟堂の模様を押し出し、本物語の帰結に照らすならば実定の形象にはアンビバレントな趣向が介在していると筆者は推定した⁽¹⁾。

廟堂にときめいていた甥の執政の「臣」九条良経の頓死と兄の兼実の逝去とが重なったこともあって、承元元年(一二〇七)頃より治世を静観する立場に慈円は身を置く。西山の往生院に隠棲したわけであるから、仏法・王

法の中核から外れた。が、承元三年(二〇九)三月の良経の女である立子の入内の慶事がもたらされたこともあって、「あそび心」が湧出した慈円は、「頼朝の物語」を内実とする『治承物語』を創出させ、『治承物語』を取用して承久三年(二二二)四月に良経の嫡子である道家が摂政に就いた事象を末代の道理として『愚管抄』を成立させる。⁽²⁾

西山の草堂で治承四年(二一八〇)に『古今和歌集』を校合していた寂超は、『大鏡』の後を引き継いで、嘉応二年(二七二)までの歴史時間を対象にした『今鏡』を創ったことは、「序」に、

世継が申しおける万寿二年より、ことしは嘉応二年庚寅なれば、百年あまり四十の春秋に三年ばかりや過ぎ侍りぬらん。

と記載している。『大鏡』の語り手の大宅世継の孫の老嫗が回顧する趣向を踏襲した『今鏡』を、松村博司が「結果においては栄花物語と似た体裁ともなり、大鏡・栄花物語の両者を折衷した新体を創始した形となった。(中略)全く栄花物語の系統に属する」ところの「世継物語」であったと評している。⁽³⁾『今鏡』を概観すると「菊の宴」・「藤波」・「釣せぬ浦々」・「二葉の松」等の章段があり、最初の「世継物語」である『栄花物語』の章段名の「月の宴」・「浦々の別れ」・「松の下枝」等と類同しているのは確かであろう。

筆者は、既存の「世継物語」に倣いながら、嘉応二年(二七〇)の平家側による執政の「臣」への横暴すなわち「殿下乗合」より「伊豆国流人前右兵衛佐頼朝謀叛」から始発する「いくさ物語」を創出するために西山の空間に慈円は、有縁の人材を呼集する。すなわち慈円圏を組織して原『平家物語』の『治承物語』を企画・創出させたのであった。それを取用した『愚管抄』を精読している慈円の甥すなわち九条良経の嫡男の道家は、四条天皇の摂政になり、治世を領導する執政の「臣」であった嘉禎三年(二二三七)頃から仁治元年(二四〇)までの時期に法性寺の空間で六巻本『治承物語』を再編するために有縁の学才や文才のある人材を呼集する。道家は慈円継承圏ともいふべき慈円周辺圏を主導したと小著『愚管抄の言語空間』(汲古書院・二〇一四年)で論じた次第である。

慈円圏と慈円周辺圏すなわち『平家物語』初期生成に藤原定家も参画しているとの思いが筆者に湧出するに

至った。その私見を具体的に開陳していこうと思う。その手初めとして、松村博司の施線部「栄花物語の系統」の言説に着目しながら、定家の歌・歌論と『治承物語』を遺存している屋代本『平家物語』と『愚管抄』との接点を窺うことが本論の眼目なのである。

(一) 編纂された原『平家物語』の『治承物語』

『愚管抄』別帖の冒頭で、

トシニソヘ日ニソヘテハ、物ノ道理ヲノミオモヒツツケテ、老ノネザメヲモナグサメツ、イトゞ、年モカタブキマカルマヽニ、世中モヒサシクミテ侍レバ、昔ヨリウツリマカル道理モアハレニオボエテ、神ノ御代ハシラズ、人代トナリテ神武天皇ノ御後、百王トキコユル、スデニノコリスクナク、八十四代ニモナリニケルナカニ、保元ノ乱イデキテ後ノコトモ。マタ世継ガ物ガタリト申モノヲカキツギタル人ナシ。少々アルトカヤウケタマハレドモ、イマダエミ侍ラズ。

(卷三——二二九ページ)

「武者ノ世」の同時代史を、既存の「世継物語」に倣つて叙述していくと揚言した慈円は、二重施線（以下、引用文章の施線や圈点等はすべて筆者。）では『今鏡』を念頭に置いている。さらに別帖の六十代醍醐天皇の条に、

コノ貞信公の御子ニ小野宮・九条殿トテオハスメリ。此事ドモハ、ヨツギノ鏡ノ卷ニコマゞトカキタレバ申ニヲヨバネドモ、ツジゞノアフトコロヲバ申ベキニヤ。

(卷三——一五七ページ)

二重施線では『大鏡』に依拠し、藤原忠平の子の実頼（小野宮流）や師輔（九条流）の子孫のことを叙述していった。撰関政治の治世を経て、院政が機能する時局に至り、平家一門の「オゴリ」を描き、源平の争乱の世へと及ぼせる。本章では「世継物語」の系譜のうえに『治承物語』を位置付けた慈円圏の文事からみていくことにしよう。

平清盛は、外孫の八十一代安徳天皇の在位している治承四年（一一八〇）六月二日に京から福原へ遷都を断行した。同年八月十五日の「月見」の年中行事を、『治承物語』を遺存させている屋代本『平家物語』の本文では、

同廿三日、已二事始有テ、八月十日上棟、十一月七日御幸ト被_レ定。旧都ハ荒行ハ、今都ハ繁盛ス。(中略其
中二徳大寺佐大将実定卿ハ、古キ都ノ月ヲ恋ヒテ、入道相国ノ方ヘ案内ヲ宣テ、福原ヨリ被_レ上ケル。何事
モハヤ替ハテ、門前草深ク、(中略)実定卿其御所ヘ参テ、待宵小侍從呼出シ、古ヘ今ノ物語シ、サ夜モ漸々
深行ハ、ヤウヂヤウノ音取朗詠シテ、旧都ノ荒行ヲ、今様ニコソウタハレケレ。

旧キ都ヲ来テミレハ浅芽力原トソ荒ニケル

月ノ光ハクマナクテ秋風ノミソ身ニハシム

ト、推返_ク二三反ウタヒスマサレタリケレハ、大宮_ヲ始メ進_セテ、御所中ノ女房達、皆袖ヲソヌラサレケル。
夜モ已曙ケレハ、大将暇申給テ、又福原ヘトテソ被_レ下ケル。

(巻五「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇太后宮大宮御所被参事」)

とあつて、徳大寺実定は新都福原から大宮こと妹の多子(第七十六代近衛天皇皇后であつたが、二代後の二条天皇にも入内し、「二代后」と称せられた。)のいるさびれた近衛河原の御所へもどつて来て、今様をうたう模様が象られている。すでに筆者は本物語にとり上げられた正月から師走に及んでいる年中行事を分析して、当該の治承四年八月十五日に行なわれた「月見」を「しめやかな優美な遊びの要素を、ここにあつては悲愴な美に変色させている」と評したのであつた。⁽⁴⁾

『栄花物語』(巻第一「月の宴」)には、治承四年(一一八〇)より遡ること二百二十五年前に、

康保三年八月十五夜、月の宴させたまはんとて、清涼殿の御前に、みな方分ちて、前栽植ゑさせたまふ。

左の頭には、絵所別当藏人少将濟時とあるは、小一条の師尹の大臣の御子、今の宣耀殿女御の御兄なり。右の頭には、造物所别当右近少将為光、これは九条殿の九郎君なり。劣らじ負けじと挑みかはして、絵所の方には洲浜を絵に書きて、くさぐさの花、生ひたるに勝りて書きたり。遣水、巖みな書きて、(中略)いとおもしろし。かかれども、歌は女郎花にぞつけたる。

左方、

君がため花植ゑそむと告げねども千代まつ虫の音にぞなきぬる

右方

心して今年は匂へ女郎花咲かぬ花ぞと人は見るとも

御遊びありて、上達部多く参りたまひて、御祿さままなり。これにつけても、宮のおはしまししをりに、いみじく、事の榮えありて、をかしかりしはやと、上よりはじめたてまつりて、上達部たち恋ひきこえ、目拭ひたまふ。花蝶につけても、今はただ、おりるなばやとのみぞ思されける。〔卷一・四八〕

六十二代村上天皇退位直前の清涼殿で人々が今は亡き中宮安子の素晴らしさを思い出し、歌を詠じあつて、感涙に咽んだとみえている。施線の藤原濟時（九四一—九五）とは、『愚管抄』で「貞信公ノ御コトハイカニモくタゞウチアル人ニハヲハセズ。」〔卷三——一六一ページ〕と称揚された藤原忠平の五男の師尹を父にもち、琴の名手で『拾遺和歌集』以下の勅撰集に入集する歌人であつた。頼朝の挙兵後、平知盛が率いる軍勢が東国へ発向したのは治承四年十二月二日であつたわけだが、『玉葉』同月二十三日条に「外記大夫師景参る。前に召し天変の事を問ふ。大喪兵革等あり。尤も恐るべしと云々。件の男小一条大将濟時卿自筆記三卷（天祿二年二卷、同三年下一卷）を志与す。不慮に伝へ得し所なりと云々。」と記載されており、争乱の最中に濟時の「自筆記」を恒例行事の奉行を司る五位の役人師景から記主の兼実は受け取っている。廟堂では濟時の故実への見識が知られていた。『愚管抄』に「コノ貞信公ノ御子ニ小野宮・九条殿トテヲハスメリ。コノ事トモハヨツギノカガミノ卷ニコマくトカキタレバ申ニヲヨバネドモ、」〔卷三——一五七ページ〕と叙述されている。『愚管抄』に撰取されている『大鏡』では、村上天皇の子の八の宮すなわち永平親王のコミカルな事象を語っている。すなわち、

御甥の八宮に大饗せさせたまつりたまひて、上戸におはすれば、〔中略〕大將は「なにせむに、かかることをせさせたまつりて、また、しかのたまへとも、教へ聞こえさせつらむ」と、悔しく思すに、御色も青くなりてぞおはしける。〔中略〕いみじき心ある人と世覚えおはせし人の口惜しき辱号をとりたまへるよ。〔師尹伝・七五〕

との一節があり、甥の永平親王による大饗での滑稽を描いていたのであつた。知的障害者の甥を「濟時は承知し

ていながら」と二重施線で詰って、施線に及んで済時を思量深い人であった評判をとっておりながら恥になる評判をひろめたとの寸言を添えている。すでに『栄花物語』の「月の宴」の巻でも「宮には、八の宮参らせたまひて、(中略)殿、いとあまましういといみじと思して、すべてものものたまはず。」^{〔七八〕}とみえていた。「殿」すなわち済時は永平親王の滑稽に茫然自失して無言であったと括っている。後出の『大鏡』よりは永平親王に話題の中心を据えており、『栄花物語』では小一条家の擁する永平親王の「をこ話」(暗愚譚)を長々と挿入して当家の没落へ及ぼせることによって、九条家の人々の栄光を鮮明に押し出していく。「をこ話」をめぐる逸話をそのまま取用したのである。

編纂の原史料の永平親王の「をこ話」を用いながら、小一条家と九条家との対照化を図り、九条家が天皇家と外戚を築いていく道筋を『栄花物語』は企図したのであった。^{〔五〕}

『愚管抄』は摂関政治から現今末代の政治形態である院政へ推移させていく。生母が藤原摂関家ではなかった七十一代後三条天皇をめぐってみていくと、崩御する直前の住吉詣の事象をとり上げ、

延久四年十二月八日御讓位ニテ、同五年二月廿日住吉詣トテ、陽明門院グシマイラセテ、関白御トモシテ、天王寺・八幡ナドヘマイリメグラセマイラセタマイケリ。住吉ニテ和歌会アリテ、御製ニハ、

イカバカリ神モウレシト思フランムナシ船ヲサシテキタレバ

トアリケリ。ソノ中ニ経信ノ歌ニ、

ヨキツ風フキニケラシナ住吉ノ松ノシツエヲアラウシラ浪

トヨメルハコノタビナリ。サテ同四月廿一日ヨリ御惱大事ニテ、五月七日御トシ四十二テウセサセ給ニケリ。

カハル御心ノヲコリケルモ、君ノ御ワタクシヤヲホカリケン。我御身ハシバシモ御脱履ノ、チ世ヲバヲコナヒ給ハズ。

(卷四——一八八〜一八九ページ)

歌を配して施線にあるように、私心があったので院政を執行でききないで四十二歳で早世してしまったと当天皇を指弾したのは、これまでの道理としての摂関政治を突き崩した「君」であったからであると慈円は批評する。

同じ論理が平治の乱で敗死したあとの源義朝の事象にも、

サテ義朝ガ頸ハトリテ京ヘマイラセテワタシテ、東ノ獄門ノアテノ木ニカケタリケル。ソノ頸ノカタハラニ歌ヲヨミテカキツケタリケルヲミレバ、

下ツケハ木ノ上ニコソナリニケレヨシトモミヘヌカケツカサ哉

トナンヨメリケル。是ヲミル人カヤウノ歌ノ中ニ、コレ程一文字モアダナラヌ歌コソナケレトノ、シリケリ。

(巻五——二二七ページ)

噓し首にされてしまつてゐる無残な頼朝の父の義朝を擁護した落首をとりあげ、施縁で一字も無駄もなく巧みであるとの世評を添えた。乱後には徳大寺実能の女を中宮とした二条天皇が親政を行おうとして、父の後白河院の院政に批判的になつていく時局へ推移させ、

コノ後白河院ノ御世ニテ、世ヲシロシメヌスコトヲバ、イカバトノミオモヘリケルニ、清盛ハヨクくツ、シミテイミジクハカライテ、アナタコナタシケルニコソ。

(巻五——二二九ページ)

と叙述している。施縁で院と天皇との間を巧妙に立ち回る平清盛の政治行動を道理から把握しており、その後、清盛による遷都さらには南都焼亡による王法と仏法との危殆に瀕している治世へ直結させて、

伊豆國二頼義朝ガ子頼朝兵衛佐トテアリシハ、世ノ事ヲフカク思テアリケリ。平治ノ乱二十三ニテ兵衛佐トテアリケルヲ、(中略)物ノ始終ハ有^レ興不思議也。

(巻五——二五一〜五二二ページ)

との言辭を添えて、以下の叙述で慈円は、「武者ノ世」を領導する頼朝を正面に押し出していく。要するに、時宜相應の作り替えられていく道理が顯著に通底している。そのため後三条天皇崩御の後には改めて「後三條院ノ位ノ御時、」(巻四——一八九ページ)として、当天皇の治世を具体的に詳述して、摂関家の藤原頼通と和合していったことを微細に押し出し、「宇治殿ハサウナクハラくト涙ヲオトシテ、」世ノ中ヲボツカナカリツルニ、アハレナヲコノ君ハメデタキ君カナ。トクくイデタチテマイラセラレヨ」トテ、ヒシくトサタアリテ、(中略)後三條ノ聖主ホドニヲハシマス君」(巻四——一九九ページ)と礼讃したのであった。アンビバレントな叙述展開なのであ

る。この『愚管抄』の方法は『治承物語』を遺存している屋代本『平家物語』と軌を一にしている。^[6]

頼通の曾孫の慈円は、『治承物語』を企画・創出させる二世紀近く以前の長元六年(一〇三三)頃までには『栄花物語』正編三十巻は成立していた。正編は赤染衛門が旺盛な編纂意識のもとに統括者・編纂者となつて仕上げたとされ、続編十巻は赤染衛門の可能性もあるが出羽弁・周防内侍等も候補にあげられている。^[7]すでに山中裕は『栄花物語』は「編纂書としての物語風史書」であると規定、^[8]そして「特に、はじめの方の巻の年中行事の叙述は、九条家流の発展の主題のなかに編年をたすけるために、つかわれた」と山中が論じていることをも付言しておこ^[9]う。

(二) 慈円圏で創出した『治承物語』の新古今的ということ

前章(一)に掲出した『愚管抄』の後三条天皇と源経信との歌は、『栄花物語』に載っている。すなわち「二十五日の辰の時ばかりにぞ御船出す。(中略)歌ども講ぜさせたまふ。」としたあとに、

御製

住吉の神もあはれと思ふらんむなしき船をさして来れば

(中略)

沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白波

左大弁経信

(巻第三十八「松のしづえ」・二七)

源経信が詠じた歌の下句にある「松の下枝」が『栄花物語』の本章段名の由来であった。『十訓抄』によると「後三条院、住吉社に御幸ありける時、経信卿、序代を奉られけり、その歌にいはいはく、」とあり、当該歌をめぐって「自嘆していはいはく、(中略)あひしらひしつべきは、わが『沖つ風』の歌こそあれ」(十ノ五)として、施線で「沖つ風吹

きに……」の歌を介して経信の情熱が仕組まれている。源経信（一〇一六～九七）は院政期初頭の歌壇の総帥であり、後述するように俊成そして定家にも高く評価されていた。一方、後三条天皇の歌をめぐって経信の子の俊頼は自己の歌論に於いて、

その心は、位にておはします程は、船に、物を多くつめれば、海を渡るに、おそりのあるなり。その荷を、取りおろしつれば、風吹き、浪高けれども、おそりのなきにたとふるなり。（中略）その心は、般若は、よろづをむなしと説くなり。般若の舟にのりて、苦界を渡れば、神仏の、よろこばせ給へば、住吉の明神も、あはれと思し召すらむと詠ませ給へるなり。

（『俊頼髓腦』一五・歌と故事）

として、在位しているといろいろと恐れがあるが、船の荷を下ろせば風が吹こうが浪が高からうが何の恐れもなく、空しき般若の舟（『般若心経』では一切は空と説く教え）に乗って、仏説の苦界を渡れば、冥衆も喜悅されるので、住吉明神も感応されると説いており、慈円の説論する『愚管抄』の「冥顯二法」の道理の「冥」にそのまま通じるであろう。ただし、前章で掲出したように『愚管抄』では「イカバカリ神モウレシト思フランムナシキ船ヲサシテキタラバトアリケリ」であった。『栄花物語』に載る後三条天皇の歌では、上の句「住吉の神もあはれ」とあったのが「イカバカリ神モウレシト」と慈円は切り返している。これを如何に解釈すべきであろうか。

『新古今和歌集』の歌人慈円が叙述した史論の頃より、四半世紀前の建久三年（一一九二）九月十三日に詠作した「住吉百首」に、

祈るべし昔に帰るわが国をさてながらへん住吉のかみ

（二五九四）

と詠じて、慈円は治世が安穩であることを住吉明神に祈請していた。そこで俊成が、

俊成入道此百首歌を見てよめる

神もいかに心に染めて照しけむ御法の後の言の葉の色

（二六〇四）

と本百首に和していた。慈円そして定家の父も明神への篤い信仰を懐いている。『愚管抄』では後三条天皇・経信の二首の直前には、「……御讓位ニテ、同五年二月廿日住吉詣トテ、（中略）住吉ニテ和歌会アリテ、御製二八、」

とあった。施線の語句を避け、あらためて在位中の摂関家との和合を詳述して「後三條ノ聖主ホドニヲハシマス君」と括る『愚管抄』の道理と述懐歌の修辭から、「イカバカリ神モウレシト」と変更したとの解釈も可能である。¹⁰⁾ 次章(三)で論じるように『愚管抄』は『栄花物語』を受容しており、先行の「世継物語」の影響なのである。『愚管抄』別帖で七十一代後三条天皇の条から七十二代白河天皇の条へ及ばせる直前で、

後三條ノ聖主ホドニヲハシマス君ハ、ミナ事ノセンソスエトニヲチタ、ンズル事ヲ、ヒシト結句ヲバシロシメシツ、御サタハアル事ナレバ、撰録ノ家関白摂政ヲスマロニニクミステントハ何カハヲボシメスベキ。

(中略) 猶百王マデタノム所ハ、宗廟社稷ノ神くノ御メグミ、三寶諸天ノ利生ナリ。コノ冥衆ノ利生モ、又ナカバ、人ノ心ニノリテコソ、機縁ハ和合シテ、事ヲバナスル事ニテ侍レ。ソレモ心エガタクフカシギノ事ノミ侍ルベシ。ソノ中ニコノ白河法皇御位ノ後、……、

(巻四——一九九〜二〇〇ページ)

との文章を慈円は布置し、二重施線は「冥顯二法」の道理に則りながら、別帖の八十四代順徳天皇の条を承けての跋文にあたる文章のなかで、

末代ノ道理ニカナヒテ、佛神ノ利生ノウツハ物トナリテ、今百王ノ十六代ノコリタル程。佛法王法ヲ守リハテンコトノ、先力ギリナキ利生ノ本意、佛神ノ冥應ニテ侍ルベケレバ。ソレヲ詮ニテカキヲ侍ルナリ。

(巻六——三二七ページ)

と披瀝するからであった。¹¹⁾ さらに『栄花物語』に載っている後三条天皇と源経信との歌は、『愚管抄』付録のなかの「①心ノヲホクコモリテ時ノ景氣ヲアラハスコトハ、カヤウノコトバノサハくトシラスル事ニテ侍也。児女子ガ口遊トテコレヲオカシキコトニ申ハ。②詩歌ノマコトノ道ヲ本意ニ用イルコトナリ。③愚癡無智ノ人ニモ物ノ道理ヲ心ノソコニシラセントテ、(中略)④ミナコノ假名ノ戲言ニモ……」(巻七——三三二ページ)との叙述部分と呼応してこよう。『栄花物語』にある後三条天皇の「住吉の神もあはれ」の当該歌を俊成は歌の理想と讃え、「歌はただよみあげもし、詠じもしたるに、何となく艶にもあはれにも聞ゆることあるべし。」(『古来風躰抄』・三)とし、後述するように定家も「和歌十躰」をめぐつて「やさしく物あはれによむべき事」(『毎月抄』・三)と開陳、

「景氣の歌とて、姿・詞のそそめきたるが、何となく心はなけれども歌さまの宜しく聞ゆるやうをよむべきにて候。」(『毎月抄』・「四」として「詞の使い方に目立つところのある情景的な歌」を求めつつ、『愚管抄』の①・②で俊成と同様のことを批評している。②の定家が進めている「歌ノマコトノ道」とは異なると慈円は④のように『愚管抄』の文章を卑下するのであった。

『愚管抄』に取用された後三条天皇の歌の上の句にあった「住吉の神もあはれ」も「イカバカリ神モウレシ」と平明な「假名ノ戯言」の俗語に置き換えたとの解釈が導き出されるであろう。

前掲したように『毎月抄』で、基本的な詠歌の方法を説論しているなかに、「和歌十牀」(幽玄・事可然・麗・有心・長高・見・面白・有一節・濃)の歌風を紹介して、

先哲のくれぐれ書き置きける物にも、やさしく物あはれによむべき事とぞ見え侍るめる。

〔二〕

優れた先人の歌論書にも「あはれ」すなわち優美で何となくしみじみとし聞こえてくように詠むとあると見えると定家は説いており、二重施線「あはれ」とは、詠歌の究極の象徴美をさすのは周知のことである。他方、「愚癡無智ノ人」に説論していく『新古今和歌集』の代表的歌人である慈円の胸底に根ざしているので本歌を切り替えたと判断される。要するに慈円の史論の『愚管抄』と定家の歌論である『毎月抄』の筆致とは類同していると推測できよう。したがって、『愚管抄』の、

……住吉ニテ和歌会アリテ、御製二八、

イカバカリ神モウレシト思フランムナシキ船ヲサシテキラバトアリケリ

との歌は、『栄花物語』で、

御製

住吉の神もあはれと思ふらんむなしき船をさして来れば

とあつた上の句を変更しているからには本歌取りの修辞で、史論に組み込んだ。

歌人の慈円は、当該歌を『栄花物語』巻第三十八「松のしづえ」の章段をはじめ本書全体と、本章段の特質を

弁えて取用している。それ故に、同時に史論では本説取りをも凝らしたとの解釈が成り立つともいえよう。

定家の父の俊成は前掲したように『古来風躰抄』で歌の理想は、

歌はただよみあげもし、詠じもしたるに、何となく艶にもあはれにも聞ゆる事のあるべし。

〔三〕

何となんとなく優雅にも「あはれ」にも感じられるものだとする。『万葉集』から自己が編纂した『千載和歌集』までの歌を抄出していくわけである。周知のように平忠度は一門都落ちの途中から引き返し、詠草を俊成に託し、後に本歌集の撰進のとき、「詠み人知らず」として載せられた逸話がある。それを『治承物語』を遺存している屋代本に沿ってみていこう。平忠度が「何クヨリカ引返サタリケム」・「ヨビタ、シク騒動ス」等と平易な語句を多用しながら、俊成に歌稿を託して一門と合流していく情況を押し出す。俊成が忠度の願いを承諾したので、悠然と西に向かつて馬を進める。すなわち、

……薩摩守ノ声ニテ、「前途程遠シ、馳ニ思於雁山夕雲ニ」ト、高ラカニ打詠給ヘハ、三位聞レ之、涙ヲ押入給フ。

ケニモ世鎮テ勅撰有。前千載裁集是ナリ。其中ニ忠度歌一首被レ入ケリ。志切ナシシカハ、アマタアモ入ハヤトハ被レ思ケレトモ、勅勘ノ人ナレハ、名乗ヲモ不レ露、読人不レ知トソ入ラレケル。「故郷花」ト云題ニテ被レ読タリケル歌ナリ。

樂名サ、ナミ実ヤシカノ都ハアレニシヲ昔ナカラノ山桜カナ

其身既ニ朝敵ト成ニシ上ハ不レ及ニ子細トハ云ナカラ、口惜カリシ事供ナリ。

と描かれていた。石田吉貞は「都を追われて各地をさまよい回った人間忠度の生に足跡を記せばそれは『平家物語』となり、その流離敗亡の悲しみを歌えば、それはこのような新古今的な歌となるのである。(中略)『平家物語』が新古今的であるということは、正しくは原『平家物語』についてだけいえることで、十二巻の『平家物語』は現実のあらゆる闘争や葛藤を取り入れることによって、もつとはるかに複雑なものになっている。」と論じた。^{〔12〕}施線の言説から『治承物語』は「新古今的」であつたことになろう。

安元元年（一一七五）十二月八日、子の定家は侍從任じられており、治承二年（一一七八）三月十五日、十七歳の當時に賀茂別雷社歌合に於いて三首出詠していた。一方、物語の冒頭にある「忠盛昇殿事」の章段で忠盛の機転と郎等の武勇のすさまじい気迫のために貴族の威圧の難を免れる。そのうえ鳥羽院より、

「……且ハ武士之郎等ノ習ナリ。忠盛力科ニ非ス」ト還テ預ニ觀感ニ一上ハ、敢テ罪科之沙汰モ無リケリ。

との賞讃があつて、本章段より以降では、平家一門は廟堂へ進出していく経緯が描かれていく。本章段の主人公である忠盛の六男の忠度は、治承三年（一一七九）十一月当時、三十六歳にして正四位下・伯耆守であつた。定家は治承四年一月五日に従五位上になつており、その三ヶ月後には清盛の孫が安徳天皇として即位する。廟堂で一門が華やいていた模様を定家は熟知していた。谷山茂が、

平家の君達の優美妖艶な現実の窓を通して（中略）藤氏黄金時代の遠い過去に対する憧憬と理解（中略）平家の興隆がもたらした若々しい華やかな現実的雰囲気は、若き日の定家らの直接体験ともなり、（中略）いろいろの古典における妖艶の要素が、実感をもつて摂取されたのである。そして、ここにはじめて新古今的妖艶の美の世界が形成されたとしても、決して不思議ではない。^[13]

施線部で「新古今的」と評したのは括目に値しよう。建仁元年（一一〇一）七月二十七日、和歌所が設置されると寄人に慈円等とともに四十歳の定家も選ばれる。『新古今和歌集』清書されて決定本が完成するのは五十五歳の建保四年（一一二六）十二月二十六日であつた。

最初の「世継物語」の『栄花物語』と同系統（松村博司の言説）にして同質の特色（廟堂の精神や挿話を叙述）がある『今鏡』を引き継いで、既述したように慈円は西山の空間に有縁の人材を呼集して、「頼朝の物語」を内実とする「いくさ物語」の『治承物語』を創出させた。それを『愚管抄』の別帖で取用しつつ、承久三年（一一三二）四月二十日に九条道家が摂政に就いた事象を「道理必然」との言辭を皇帝年代記に嵌入する。すなわち、その事象を未代の道理の顯現とみなした慈円は、皇帝年代記に八十五代の仲恭天皇紀を布置して『愚管抄』を成立させたのであつた。^[14] 定家が六十歳の時である。承久の乱があつて、道家は摂政辞任に追い込まれてしまった。その十三年後の貞

永元年（二三三）十月四日に八十七代四条天皇が即位する。慈円の甥である九条良経の嫡男の道家は、当天皇の外祖父であつたから廟堂を領導する。「道理必然」の事象が復元したのであつた。『愚管抄』を道家は精読しており、法性寺の空間に慈円継承圏ともいふべき慈円周辺圏を執政の「臣」になつた道家は主導し、『愚管抄』を取用して『治承物語』を六巻本に再編し終えるのは仁治元年（二四〇）頃であつた。定家が寂したのは翌年八月二十日^[14]なのである。

『平家物語』初期生成から定家を顧慮せねばならないであろう。

（三）『栄花物語』受容から定家へ

『愚管抄』には、準太上天皇の待遇を受けた彰子を娘としている道長を、

國母ハ又上東門院也。御堂ノ嫡女ゾカシ。ソノ後御堂ハ入道ニテ萬壽四年マデ立ソイテヲハシケル。メデタサ申力ギリナシ。

（巻四——一七八〜九ページジ）

と礼讃している。定家も撰者となつた『新古今和歌集』に、寛仁三年（二〇一九）三月二十九日に出家した直後の、

世をのがれて後、四月一日、上東門院、太

皇太后宮と申しける時、衣替への御装束奉

るとて

法成寺入道前摂政太政大臣

唐衣花の袂に脱ぎ替へよわれこそ春の色は絶ちつれ

（二四八二）

御返し

上東門院

（二四八二）

唐衣たちかはりぬる春の夜にいかでか花の色を見るべき
父子の愛情深い贈答歌が採られている。当該の二首は、すでに『栄花物語』に、

……大宮に唐の御衣に添へさせたまへる、

唐衣花のたもとに脱ぎかへよわれこそ春の色はたちつれ

大宮御覽じて、いみじう泣かせたまひて、御返し、

唐衣たちかはりぬる春の夜にいかでか花の色を見るべき

(巻第十五「うたがひ」・(八))

と叙述されていた。当該の巻では、道長一族すなわち九条家の発展を基軸にしているので「王法」の模様であり、「仏法の命を継がせたまふ(中略)暗きに入れる衆生も、この御光に照らされて喜びをなす。」(二四)ともあるので、慈円が仏法王法相依の道理を揚言する『愚管抄』の下地を作っていた。⁽¹⁵⁾

『栄花物語』の受容を確認しておこう。『宝物集』原初本に取用されていることを筆者は指摘している。⁽¹⁶⁾『古本説話集』の典拠になっていることを高橋貢によって指摘されている。⁽¹⁷⁾さらには近時、「花山院出家譚のなかでも、厳久が説経を行う描写が見えるのは、『栄花物語』と『愚管抄』のみである。」と論じた児島敬祐は「『愚管抄』の書きぶりは、『栄花物語』が既に簡単にふれていた厳久の活躍に、あらためて光を当て、叙述量を格段に増やし、より「仏法」の側面を打ち出した記事と見ることができる。」との見解を呈示されるに至った。⁽¹⁸⁾

慈円圏にも『栄花物語』は素材として活用されていく。

『栄花物語』には、既述したように後三条天皇や経信をはじめ廟堂にかかわる人々の四十五首の歌を載せている。そのうちの聡子内親王に仕えた女房が、

天降る神のしるしに君に皆よはひはゆづれ住吉に松

(巻第三十八「松のしづえ」)

であつて、冥衆のはからいで「君」の後三条天皇の寿命をお譲り下さいと祈念した一首が載っている。『新古今和歌集』(巻第七 賀歌)に、後鳥羽院の長久を寿ぎながら、歌道興隆籠めた、

千五百番歌合に

藤原定家朝臣

わが道を守らば君を守るらん齡をゆづれ住吉の松

(七三九)

との歌が入っている。『栄花物語』巻第三十八「松のしづえ」にある「天降る神のしるしに君に皆よはひはゆづれ住吉の松」の当該歌を殆どそのまま取り込んだのであった。⁽¹⁹⁾七三九番歌は復唱のようなもので、前章(二)で

論じたように『栄花物語』の後三条天皇の歌「住吉の神もあはれと思ふらんむなしき船をさして来れば」を『愚管抄』に「イカバカリ神モウレシト思フランナシキ船ヲサシテキタラバ」であったから、同一の修辭を慈円も踏襲したと判断してよいであろう。

定家の『新古今和歌集』に採られた七三九番歌は、冥衆にむけて後鳥羽院への加護を率直に懇請した重厚な歌境といえよう。慈円圈に参画していく定家が想定されてくる。

(四) オマージュとして受容した『栄花物語』

八十代の高倉天皇には四人の皇子がいて、第一皇子を清盛は八十一代安徳天皇として擁立させ、外祖父の立場で廟堂をしきった。頼朝の旗揚げの情報を知るなかで清盛は世を去って、平家一門の政治基盤は頼朝勢の追い上げの中で後退し始め、寿永二年（一一八三）七月二十五日に安徳天皇と第二皇子の守貞親王を護持して平家側は西国へ去った。同年八月五日、第三皇子の惟明親王と第四皇子の尊成親王とが皇太子の候補にあがった。物語は、

高倉院ノ皇子、先帝ノ外、三所渡ラセ給ケリ。二宮ヲハ平家儲ノ君ニシ奉ントテ、奉_レ具テ西国ヘ下向ス。三、四八未都ニ坐々ケルヲ、八月五日、法皇此宮達ヲ迎寄進テ、先三ノ宮ノ五歳ニ成セ給ヲ、法皇、「是ヘク」ト仰ケレハ、法皇ヲ見進セサセ給テ、大ニムツカラセ給間、「トウク」トテ出シ進セサセ給ヌ。其後四ノ宮ノ四歳ニ成セ給ヲ、法王、「是ヘ」ト仰ケレハ、少モ憚ラセ給ハス、聽御膝ヘ奉ラセ給テ、ヨニモナツカシケニソ坐々ケル。法皇御涙ヲ流サセ給テ、（中略）内々御占ノ有シニモ、「四宮位ニ付セ給テハ、天下可_レ穩」トソ申ケル。

（屋代本・巻八「四宮讓位事」）

と描いている。王法の頂点すなわち廟堂の中枢にいた後白河院を、施線にあるように自己の膝に寄つてきた孫の「四宮」すなわち尊成親王に感涙し、立坊（立太子）を決断したと象った。「顕」の側から把握している。その後、二重施線で「冥」側からも捉えたのであった。この場面の趣同は『愚管抄』と全く重っている。そこで、次に『愚

管抄』からみていこう。

源平の争乱が激化して壇ノ浦の海戦で勝利した頼朝が王法に参入していく顛末を道理として慈円は叙述する。『愚管抄』別帖の八十二代後鳥羽天皇・八十三代土御門天皇・八十四代順徳天皇在位する世へと推移させた。別帖の「跋」の文章に及ばせる直前で現今の王法の頂点に在る院政をしく後鳥羽院を「不力思ギノ君ノ御運、御案ノメデタサト、心アル人ハコレヲノミメデタクゾオモヒタリケル。」(巻六——三七ページ)と礼讃している。他方、八十一代安徳天皇の条で、当天皇を護持して平家都落ちをしていったあとの王法の内情すなわち廟堂の様子を、イカサマニモ國王ハ神璽・寶劍・内侍所アイグシテ西國ノ方へ落給ヒヌ。コノ京ニ國主ナクテハイカデカアラント云サタニテアリケリ。(中略)高倉院ノ王子三人ヲハシマス。一人ハ六ハラノ二位ヤシナヒテ船ニグシマイラセテアリケリ。イマ二人ハ京ニヲハシマス。ソノ御中ニ三宮・四宮ナルヲ法皇ヨビマイラセテ見マイラセラレケルニ、四宮御ヲモギラヒモナクヨビヲハシマシケリ。又御ウラニモヨクヲハシマシケレバ、四宮ヲ寿永二年八月廿日御受禪行ハレニケリ。ヨロツ新儀ドモナレド、仰合ツ、右大臣コトニ申ヲコナヒテ、國王コ、ニ出キサセヲハシマシテ、世ハサレバイカニ落居ナンズルゾト、……

(巻五——二五六ページ)

と叙述していたので、二重施線「四宮」をめぐる叙述に着目すれば、前掲した二重施線の『治承物語』を取用しながら、別帖の八十二代後鳥羽天皇の条を慈円は始発させていたことになる。²⁰⁾この右文にある後鳥羽院が立坊(皇太子になる)する事象をめぐつて、『玉葉』寿永二年(一一八三年)八月十八日条に、後白河院と立坊する尊成親王の対面の場面そのものはないものの、

この事先づ始め高倉院の両宮を以てトせらる處、官寮共に兄を以て吉となす由これを占ひ申す。その後、女房丹後(御愛物遊君、今は六条殿と号す)の夢想に云はく、弟宮(四位信隆卿の外孫なり)行幸あり。松の枝を持ちて行く由これを見る。法皇に奏す。(中略)この立王の沙汰の間、数度御トあり。神定めて靈告(中略)君臣合体の儀、これを以て至極となすべきか。(中略)この夢又信すべし信すべし。

と丁寧に刻まれている。記主の兼実は、波線の「弟宮」すなわち「四宮」の尊成親王が「松の枝」をもって行く

夢を施線で、冥衆からもたらされた「霊告」と判断し、二重施線のように信奉すべきであるとの感懐をこめたのであった。この言辭は弟の慈円が建保四年（一二二六）正月の霊告の内容どおりに顕現しはじめる。霊告の符合の時局から、『愚管抄』付録の前半である「史」の論で別帖を総括して「イカニモく宗廟神ノ、猶君臣合體シテ」巻七—三三三ページと揚言して「サダカニ冥顯ノ二ノ道」（巻七—三三四—三五ページ）とする「冥顯二法」の道理を説論していったのと全く合致する。『玉葉』前日の寿永二年八月十七日条には「今日法印来らる。」とあるからには、九条家の家中にはすでに史論で展開させる尊成親王の立坊を道理としていく雰囲気ですでに充溢していたと思われる。

定家は、前年の寿永元年十二月十三日、後白河院が新造した法住寺へ臨幸するのに供奉し、尊成親王が即位した当時に待望の内の殿上人になっている。^[21] 定家の歌論『毎月抄』には、批評眼の必要を説いている結びの一節には、

さる元久ころ住吉參籠の時、「汝月明らかなり」と冥の靈夢を感じ侍りしによりて、家風へそなへむため、（中略）かやうのそぞろごとまで申し侍る 〔九〕

とあって「冥の靈夢」と記載して、詠歌の心得を説いている。あるいは、前掲の『玉葉』同年八月十八日条の枠で括った「松の枝」を持っていく尊成親王の「霊告」を弁えていたこともあろう（後述）。慈円と定家は既述したように千五百番歌合で「わが道を守らば君を守る……」（七三九）を詠じたのは定家が四十一歳、慈円は四十八歳であった。その時期より、十年近く経過した承元四年（一二二〇）頃から既存の「世継物語」に倣いながら、西山の空間で原『平家物語』の『治承物語』を企画・創出し始める。

建保四年（一二二六）正月、慈円に九条家の僥倖ともいふべき「霊告」がくだった。二年後には九条家の立子から懷成親王（八十五代仲恭天皇）が生誕する、その三年後の承久元年（一二二九）六月には立子の一歳違いの弟である道家の子三寅（第四代鎌倉將軍に就く九条頼経）が將軍繼嗣として下向した。この時運のもとで、『愚管抄』別帖の後に書き継がれた付録の前半で、本事を末代の道理と揚言した。「史」の論である。その末尾で、

タバーズチノ道理ト云コトノ侍ヲカキ侍リヌル也。

(巻七——三四三ページ)

との言辭をもつて、一旦、史論を括つた。

『愚管抄』の別帖から付録の「史」の論までをみてきたとき、次のような見解を呈示できるであろう。尊成親王の即位すなわち八十二代後鳥羽天皇となる事象をめぐる靈告の「松の枝」と住吉社で詠じた源經信の代表歌にある「松の下枝」の言辭とは、もとより時空を超えており、全く異質であつて、論理的には繋がらない。だが歌人の思念からみたならばどうなるだろうか。複雑多様な意味を持たせて奥行きをつくる掛詞・見立ての修辭からは、「松の下枝」を卷名にした『榮花物語』には畏敬の念が増す。『榮花物語』をオマージュと捉える。『玉葉』に記載されていた尊成親王が「松の枝」を持つていく靈告そのものを深く胸底にとどめた慈円は、後年、西山の間で本物語を創出させていくが、廟堂に君臨している後白河院が好意を寄せて当親王の立場をめぐる、前掲した物語の場面、

法王、「是へ」ト仰ケレハ、少モ憚ラセ給ハス、臆御膝ヘ奉ラセ給テ、ヨニモナツカシ ニソ坐々ケル。法皇御涙ヲ流サセ給テ、……

を「あそび心」もこうじて仕組むであろう。^[22]

三代鎌倉將軍の源実朝へ歌論を定家は説いている。承元三年（二二〇九）に実朝の求めに応じて書き送った『近代秀歌』のなかで、「大納言経信卿・俊頼朝臣・左京大夫顯輔卿・清輔朝臣、近くは亡夫卿、即ちこの道を習ひ侍りける基俊と申しける人、」としており、古典時代の理想的歌風を詠じた歌人の筆頭に源經信をあげた。さらに本歌論の「八代集選抄」・「近代六歌仙」のそれぞれに、『愚管抄』に取り込まれている經信の「ヨキツ風フキニケラシナ住吉ノ松ノシヅエヲアラウシラ浪」を秀歌として挙げてゐる。しかも經信の前には、前掲した『愚管抄』では、

……和歌会アリテ、御製二ハ、

イカバカリ神モウレシト思フランムナシ船ヲサシテキタラバ

トアリケリ。ソノ中ニ經信ノ歌ニ、……

とあつて、後三条天皇の歌を掲出した。『栄花物語』にも載っている、

住吉の神もあはれと思ふらんむなしき船をさして来れば

との・もの・歌を上の句と下の句の二字を慈円は変えたのであつた。

『栄花物語』(卷第三十八)の「松の下枝^{しづえ}」の巻に後三条天皇の女の聡子内親王に仕えた女房の「天降る神のしるしに君に皆よはひはゆづれ住吉に松」の上の句だけを替えて、『新古今和歌集』に、

わが道をまもらば君をまもらんよはひはゆづれ住吉の松

(七三九)

との定家が詠じた歌が入集している。七三九番歌は、『愚管抄』の後三条天皇の歌と類同する。慈円圈への定家の参画をみていくうえで意味深長であろう。

おわりに——定家の歌論の「詮」をめぐって——

九条道家の子の三寅(四代鎌倉将軍の九条頼経が將軍繼嗣として承久元年(一二一九)六月二十五日に東国へ下向する。本事を『愚管抄』別帖の八十四代順徳天皇の条で、慈円は、

六月廿五日ニ、武士ドモムカヘニノボリテ、クダシツカハサレニケリ。京ヲ出ル時ヨリクダリツクマデ、イ

ササカモクナクコエナクテヤマレニケリトテ、不可思議ノ事カナト云ケリ。(卷六——三二五——二六ページ)

施線のような言辞を添えており、「冥顯二法」の道理の「冥」から捉えた。道家の姉の立子から生誕している懐成親王の立坊をめぐっては、

上皇コトニ待ヨロコバセ給テ、十一月廿六日ニヤガテ立坊有ケリ。清和ノ御時ヨリ一歳ノ立坊定マレル事也。

(卷六——三〇六ページ)

であつたわけだが、將軍繼嗣の事象については、その先例ない。そのため「武者ノ世」の現今に及んで時宜相応

につくりかえられていく道理であることを説論していかねばならなかった。そこで別帖のあとに付録を結構する。それが「史」の論であつた（筆者の仮称、後述）。末代の道理から別帖全体を鳥瞰しながら本事象を批評していく。院の近臣が執政の「臣」をだせる摂関家の九条家と幕府とのあいだ不和をつくりだしている事態に、院政をしく主体者や周辺にいる人々も弁えてほしいと穏便に説くのであつた。ところが後鳥羽院と院の近臣による討幕計画が激化して時局は逼迫してきたので、付録をかりて慈円は自己の主張を率直に開陳する。「史」の論の文章に書き足すのが、後鳥羽院へ直接に詰め寄っていく。すなわち諫言なのである。そのため諫言の文章の末尾には、

コハ以ノ外ノ事ドモカキツケテ侍リヌル物力ナ。

（巻七——三五〇ページ）

別帖・「史」の論とは全く異なる内容になつたとの寸言を添えた。道理史観に則つた論調が破綻する。さらに、廟堂の実情を直視して、

……イヨく縉素ミナ怨敵ニンテ、闕諍誠ニ堅固ナリ。貴賤同ク無シ人シテ、言語スデニ道斷侍リヌルニナム。シゝモテマカリテハ、物ノハテニハ問答シタルガ心ハナグサムナリ。

問、サレバ今チカラヲヨバズ、カウテ世ハナナルマジキカ。

答、分ニハヤスクナホリナム。

問、ステニ世クダリハテタリ。人又ナカン也。アトモナクナリタケルコソ。シカルニヤスクナヨリナトハイ

カニ。

答、分ニハトハサセ申也。一定ヤスクナホルベキ也。

（巻七——三五六ページ）

として、さらに五つの問答を列挙して付録の文章は括られた。横柄な院の近臣の肅清とか藏人のような「人」は「鳥羽院最中ノ数、末代ヨキホド也。」（巻七——三五八ページ）すなわち現今の場合は適切であろうして、「人」の選別を自問自答のかたちで慈円は付録を閉じた。要するに中間部の諫言の延長線上にある後半部の文章は、時局を悲嘆しながらの人材論になつてしまっている。

付録の前半部は、別帖で論じきれなかつたことを慈円が道理史観に則つて展開させた。懷成親王の立場の事象を

めぐる論調と全く変更がないので、「史」の論と筆者は仮称したわけである。^[23] 後鳥羽院と院の近臣による討幕計画の実相も『愚管抄』別帖から付録の「史」の論までには慈円の胸裏にかすめることもあるので、院を含む廟堂の人々へのほどけた論理（穏当な論理）から、時には諷諫の筆致で叙述してはいた。

ここで留意したいのは史論の『愚管抄』も歌論も人に説くことなのである。

「史」の論で「物ヲイヒツバクルニ心ノヲホクコモリテ時ノ景氣ヲアラハスコトハ、カヤウノコトバノサハくトシラスル事ニテ侍也。」（巻七——三三ページ）として、慈円は、既存の真名の六国史を止揚しながら、仮名で「世継物語」のように場面や人物を精彩に放たせながら叙述していく。定家も歌論の『詠歌大概』で「常観念古歌之景氣一可染心。」とし、また『毎月抄』にも「まづ景氣の歌とて、姿・詞のそめきたるが、何となく心はなけれども歌さまの宜しく聞ゆるやうをよむべきにて候。」とも揚言し、景色を詠んだ伝統的な情趣・美観を漂わせる歌を定家は評価している。「史」の論には、

詩歌ノマコトノ道ヲ本意ニモチイル時ノコトナリ。（中略）ソレヲ又ヲシフサネテコノ心ノ詮ヲ申シアラハサントヲモフニハ、神武ヨリ承久マデノコト、詮ヲトリツ、……（巻七——三三ページ）

圈点を付したように「詮」という語彙が嵌入されている。別帖の後三条天皇の条を総括する一節にも、

後三條ノ聖主ホドニヲハシマス君ハ、ミナ事ノセンノスエぐニヲチタ、ンズル事ヲ、（中略）撰録ノ家関白撰政ヲスバロニニクミステントハ何カハヲボシメスベキ。（巻四——一九九ページ）

として、施線で「聖主」と礼讃する言辞を布置したのであった。（一）章で当天皇を「五月七日御トシ四十二テウセサセ給ニケリ。カ、ル御心ノヲコリケルモ、君ノ御ワタクシヤヲカリケン」と自分の利益だけを計る心が多かったので早世したと詰っていたから、慈円はアンビバレンスの方法で叙述している。「史」の論で人皇初代「今神武以後」（巻七——三三三ページ）より、八十四代順徳天皇の治世で九条家の頼経の將軍継嗣となつた事象は末代の道理であると揚言したなかに、

後三條院御心ニヲボシメスホドノアリケンハ、イカニメデタカリケム。サテ、トモイヘカクモイヘ、時ニト

リテ、世ヲシロシメス君ト撰籙臣トヒシト一ツ御心ニテ、チガフコトノ返く侍マジキヲ、別ニ院ノ近臣ト云物^リノ、男女ニツケテイデキヌレバ、ソレガ中ニイテ、イカニモくコノ王臣ノ御中ヲアシク申ナリ。アハレ俊明卿マデハイミジカリケル人哉。コ、ヲ詮ニハ君ノシロシメスベキナリ。今ハ又武者ノイデキテ、……

(巻七——三三三ページ)

ともみえてゐる。施線で後三条天皇をやはり礼讃し、右文の末尾では圈点にあるように「詮」を用いて、二重施線では、現今の廟堂を領導する「君」の心に差し入れる筆致にはなっている。後鳥羽院も「君」のひとりとして含まれてはいる。あくまでも諷諫であつて、諫言ではない。それは、付録の前半の「史」の論を括るにあつて、世ヲシロシメス君ト撰籙臣トヒシト一ツ御心ニテ、チガフコトノ返く侍マジキヲ、イカニモくコノ王臣ノ御中ヲアシク申ナリ。

(巻七——三三三ページ)

として、院の近臣が執政の「臣」を、だす撰閥家の九条家と幕府とのあいだに不和をつくつてゐるとの寸言を添えるだけであつた。別帖の順徳天皇の条に「不力思ギノ君ノ御運、御案ノメデタサト」(巻六——三七七ページ)と同質の論調なのである。それが、「史」の論の後に書き継いだ付録の中間部の文章にあたる諫言の始発では、

又コトノセン。一侍ルナリ。人トモウモノハ、センガセンニテハニルヲ友トストコトノ、ソノセンニテハ侍ナリ。

(巻七——三四五ページ)

となつてゐる。「セン」すなわち「詮」を頻用して、後鳥羽院へ直接に討幕計画の放棄を嘆願して、前掲したように諫言の末尾では、

コハ以ノ外ノ事ドモカキツケテ侍リヌル物カナ。

(巻七——三五〇ページ)

として、言語道断な文章であつたとの寸言を添えたのである。

『平家物語』では、平家一門が権勢を誇り、清盛の横暴が目立ちはじめにつれて、貴族側の反撥がはつきりとあらわれてきた。鹿ヶ谷事件である。平家打倒の陰謀を事前に知つた清盛は後白河院をも幽閉しようとした。それを嫡子の重盛が情理を尽くして忠言する。延慶本の「教訓状」・「烽火之沙汰」の二章段の主要内容である。

この二章段に関して諸本間に大きな異同が認められず、原作者の考えが色濃く投影している。²⁴ この内容を原『平家物語』の『治承物語』を遺存している屋代本では「重盛卿父禅門諷諫事」との章段名になっている。圏点は『愚管抄』の本質と対応している。重盛のながい忠言が大詰めに及んだ一節では、後白河院への忠義と父清盛への孝行のはざまに陥って、次のように重盛に絶叫させている。すなわち、

申請_ル所ノ詮ハ 只重盛力頸ヲ可_レ被_レ召候。イツマテカ命生テ、加様ニ乱ン世ヲハ 可_二見候_一。只末代ニ生ヲ請テカ、ル憂目ヲ見候力果報ノ程コソツタナフ候へ。
(屋代本・巻二「重盛卿父禅門諷諫事」)

であって、『愚管抄』と同一の意味なのである。²⁵ 慈円圏で本物語が創出されていた証憑の一つになるろう。

『毎月抄』の歌論のなかで、定家は「詞をこそ詮とすべけれ」(五)・「詮とおぼゆる詞二つばかりにて」(七)等と歌道初心者(源実朝)へ説諭しており、やはり一番大事な眼目との意味で用いている。定家の歌論は『愚管抄』や本物語とも同質であった。

西山の慈円圏で創出した原『平家物語』の『治承物語』や『愚管抄』等と定家の歌・歌論等との接点が看取されよう。九条家に仕えはじめて慈円と面識をもち、歌人としても慈円と親交を深めていく定家が、如何に本物語の創出に尽瘁していったかをめぐっては、別稿に譲ることにしたい。²⁶

【末尾】

註

- 〔1〕拙稿「今様をうたう徳大寺実定の意味——屋代本『平家物語』から——」(『熊本学園大学 文学・言語学論集』(第二五巻第二号・第二六巻第一号合併号)・二〇一九年六月)
- 〔2〕拙著「第七章 治承物語と西山の空間」(『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年・拙著「第九章 皇年代記の書き継ぎについて」『愚管抄の創成と方法』(汲古書院・二〇〇四年)
- 〔3〕「四 今鏡」(『歴史物語』(塙書房・一九六一年)一八二〜二二二ページ)
- 〔4〕拙著「Ⅲ 第二章 『平家物語』の年中行事」(『愚管抄』とその前後)和泉書院・一九九三年)二九〇ページ)
- 〔5〕山中裕「第三章 第一節『栄花物語』の説話性」(『栄花物語・大鏡の研究』思文閣出版・二〇一二年)

- [6] 註〔1〕と同じ。
- [7] 山中裕「第三章 第二節 栄花物語の本質」（『平安朝文学の史的研究』吉川弘文館・一九七四年）一九八〇二二ページ
- [8] 註〔5〕同書「第二章 『栄花物語』の編纂」六五ページ
- [9] 「7 歴史物語——栄花物語を中心に——」（『年中行事と文芸学』弘文館・一九八一年）
- [10] 註〔2〕同書の『愚管抄の言語空間』の「序にかえて」の「構築される空間とその外側」七ページ・「第十二章 屋代本平家物語の建礼門院の往生」六〇一ページ
- [11] 註〔4〕同書「I 第二章 第三節 後三条院と藤原能信」一一六ページ
- [12] 「第二編 第四 五 平家物語と新古今集の性格」（『新古今世界と中世文学（下）』北沢図書出版・一九七二年）四〇五～四〇六ページ
- [13] 「第一章 新古今の妖艶美と平家一門の栄華」（『新古今集とその歌人』角川書店・一九八三年）三七ページ・三九ページ
- [14] 註〔2〕同書「第II部 第七章 治承物語と西山の空間」・「第II部 第九章 再編された六卷本治承物語と九条道家」・「第II部 第十章 證空と法性寺の空間」
- [15] 拙著「第一章 王法と仏法——『栄花物語』卷十五「うたがひ」の特質——」（『愚管抄の創成と方法』（汲古書院・二〇〇四年）二五ページ
- [16] 註〔4〕同書「IV 第一章 第三節 『宝物集』一巻本の様相」、なお、筆者尾崎の本説にを左祖した松村博司は「『栄花物語』と説話」の論題で「一巻本は『栄花物語』を典拠にしている」とした（『歴史物語研究余滴』（和泉書院・一九八三年）。
- [17] 高橋貢「解説 五、出典・同話」（『古本説話集全註解』和泉書院・一九八五年）
- [18] 「『愚管抄』の説経——花山院出家譚をめぐって——」（『伝承文学研究』第六七号・二〇一八年八月）
- [19] 日本古典文学全集『新古今和歌集』（巻七 賀歌（七三九））小学館・一九七四年
- [20] 岡見正雄・赤松俊秀『愚管抄』（巻第五・補注一九九）岩波書店・一九六七
- [21] 五味文彦「第一章 時代の変転」（『藤原定家の時代』岩波書店・一九九一年）三〇～三一ページ
- [22] 註〔2〕同書「第八章 補論「あそび心」と今様」
- [23] 註〔2〕同書「第八章 付録の文章について」
- [24] 註〔2〕同書『愚管抄の言語空間』の「第八章 治承物語の復元」
- [25] 註〔24〕と同じ。
- [26] 拙稿「『平家物語』初期生成と藤原定家——編纂の視点から——」（上）（下）」（『熊本学園大学 文学・言語学論集』第五一号・

五二号・二〇一九年二月・二〇二〇年三月

〔付記〕

本論文は、「軍記・語り物研究会」(二〇一九年四月二十六日 於 青山学院大学)における口頭発表原稿『平家物語』初期生成と藤原定家』をもとにしたものである。その時の有益な質問・意見を参考にしてまとめた。